特別対談

政治ジャーナリスト 末延 吉正
JT横浜支店長 深澤 元博

たばこの楽しみ方、嗜み方

歩行喫煙やポイ捨てなどモラルを守れないのは、格好悪いですね。【深澤】

吸う人、吸わない人がお互いに懐深く、寛容の心を持って。

吸う、吸わないの論争ではなく、互いの違いに寛容性をもつことが大切だと思います。【末延】

愛煙家と非喫煙者がお互いの違いを認め寛容性をもって共存できるように。

神奈川県では「受動喫煙防止条例」の施行によって分煙化が進んでいるが、さらなる規制強化の動きもあり、愛煙家にとって窮屈感は否めない。「吸う、吸うな」という論争ではなく対話によって、お互いの違いを理解する懐の深さをもって愛煙家と非喫煙者が共存できる社会の在り方、ルールというものをつくっていくべきではないだろうか。喫煙をとりまく環境で求められているものについて末延吉正氏とJT横浜支店長の深澤元博氏に語り合っていただいた。

末延 吉正 すえのぶ よしまさ

1954年山口県生まれ。早稲田大学卒業後、テレビ朝日入社。社会部記者、経済部長、政治部記者、ニューヨーク特派員、バンコク支局長、政治部長等を経て2004年、政治ジャーナリストとして独立。政治、経済、外交、メディア等を中心に取材講演活動を展開している。また立命館大学客員教授、中央大学特認教授のほかテレビのコメンテーターとしても活躍。

ホッとしたいとき、緊張をほぐすとき、たばこに手が伸びる。

末延 政治ジャーナリストとしてご活躍の末延さんは、安倍政権誕生以後、政治を取り巻く環境が慌ただしいなか積極的に発言されるなど、多忙を極めていると思いますが、愛煙家としてどのようなときにたばこを嗜まれていますか。

末延 私にとってたばこはコーヒーやチョコレートと同様に大切な嗜好品です。リフレッシュしたいときに欠かせないもので、たとえば原稿を書くときにまずコーヒーを飲んでたばこを吸いながら、頭を回転させカチッとギアを入れてから取りかかります。原稿を書く合い間で疲れたとき、煮詰まったときなども必ず手が伸びます。また講演などで出張した際には喫煙場所を探し、講演前には気持ちを鎮め全体の流れを確認するために、講演後はお疲れさまの意味で一服つける。私にとってたばこは、肌身離せないもので、生活の一部になっていますね。

深澤 愛煙家の方に「リフレッシュのひとときを」と言っていただけることは、私たちJTにとって何より嬉しいことです。愛煙家の皆様により満足していただける製品をつくってお届けしていくのがJTの使命と考えております。ところで末延さんにとってのお至福と一服とはどのようなものですか。

末延 最近では、年末年始にある論文をまとめたのですが、短期間で非常に集中して仕上げました。そこで「これを書き終えたら開けよう」と思っていたシングルモルトのウィスキーの封を解き、好きな音楽をかけながら、心地よい疲労感と充実感とともに一服したたばこが印象に残っています。また私は以前、テレビ朝日の記者時代に世界のあちらこちらを飛び回って取材をしてきました。たとえば中東の砂漠や紛争地帯、東南アジアのジャングルなどに分け入って戦場取材をすると、非常に緊張します。そういう移動の途中で、カメラクルーや現地案内人と「ちょうと一服しよう」と言って皆で休憩しました。いつときの間ですが緊張を緩めてくれる、あのたばこの味は今も忘れられません。

公共機関や人の集う場所は分煙化を推進しマナーも徹底。

深澤 国や地方自治体の公衆衛生に関する計画などでは、たとえば喫煙率を今の19%から12%へ下げましょう、という数値目標も掲げられていますが、そもそもたばこは嗜好品であり、適正なリスク開示を行ったうえで吸うか吸わないかの判断は個人に委ねられるものだと思います。それを「ここまで下げなければいけない」といったルールの押し付けのような印象もあります。

末延 そうですね、たばこ文化というものは歴然としてあるわけで、しかも社会に貢献するために税金を納める仕組みにもなっているのですから。私は何も声高に愛煙家の権利を言いたいわけではありません。「吸う、吸うな」のたばこ論争を好むものではなく、非喫煙者の方と互いの違いを認め合い、日本人の美徳である「お互い様」の精神や懐の深さに裏付けられた寛容性をもつことが大切なんだと思います。この頃はそうした寛容性が失われているような気がします。日本の場合は長引くデフレ不況で、先行きの不透明感から日本人がいら立って、はけ口のひとつとしてたばこ（少数者）を一方的に排除していく風潮が高まっているようにも見受けられます。

深澤 人間は問題が生まれたときに新しいルールをつくってきた、というのは確かにうなずけますね。たばこでいうと、そのひとつが分煙だと思います。

今年度、すでに160件ほどの分煙化のコンサルティングを無料で行っています。【深澤】

深澤 今年度、すでに160件ほどの分煙化のコンサルティングを無料で行っています。これはもちろん無料で行っているものです。飲食店・商業施設・オフィス等、立地状況も異なれば、その喫煙場所の利用状況も異なりますので、私たちは各施設にあった分煙の方法についてアドバイスさせていただいています。活動をしていて感じるのは、分煙に対する利用者のニーズは高いものの、分煙をするためには設備投資が必要になるので、そのコストを負担することが難しいオーナーさんも多いのが悩ましいところです。神奈川県の「受動喫煙防止条例」は来年度で施行から3年を迎え、施行状況の検討と必要な見直しをされると聞いています。そうした条例の影響を受ける方々の実情にも配慮された、バランスのとれた検討を期待します。

末延 人の集まるところで分煙するのは当然だと思います。私たち愛煙家も人に迷惑をかけながらたばこを楽しめるわけではありませんから。分煙のコストについては、私にひとつアイデアがあります。公共施設については、たばこの税金によって分煙の設備を設ければいいと思いますが、民間の施設、たとえば飲食店では吸う人と吸わない人で、料金を変えればいいと思います。愛煙家の料金は非喫煙者に比べて3%高い、といったようにです。「なぜ？」と聞かれたら「分煙設備をつくったコストを料金に反映している」と答えれば納得するでしょう。そのおかげで、そのスペースで気持ち良くたばこを楽しむことができるのですから、安いものです。どうです、いい考えでしょう（笑）。

愛煙家の方々にたばこの楽しみを届け続ける。

深澤 JTでは先月、代表的なブランドの名称を変更しました。マーケティングの常識からいうとこの変更は非常に思い切ったものですね。

深澤 このブランドは発売以来35年間に渡って国内ナンバーワンブランドでしたから、正直私たちも驚きでしたが、3年以上前からプロジェクトをつくって入念に検討してきた結果なのです。

JTは現在、国内および海外でたばこ事業、医薬事業、食品事業といった事業活動を展開していますが、なかでもたばこ事業については当社成長の中核かつ牽引役と位置づけています。そこでこの代表的ブランドをより進化させ、グローバルナンバーワンプレミアムブランドへと成長させるために、今回あえて名称を刷新したわけです。

末延 JTさんは海外でも多彩なブランドで事業展開されていますね。私は消費税のダブルスタンダード論者ですが、たばこにもダブルスタンダードが必要だと思っています。たとえばいま以上にたばこ増税・値上げがあった場合、否応なくたばこから離れる愛煙家が多くなるのではないでしょうか。

深澤 過去のたばこの増税・値上げでは、しばらく消費が落ち込みますが次第に回復していく流れでしたが、前回の大幅な増税・値上げにおいては落ち込んで後もなかなか戻ってきませんね。

末延 いくら価格が上がってもたばこを買えるという人は限られていて、収入面からもできるだけ低価格なたばこを求めている愛煙家もいます。そういう人たちの楽しみを取り上げないでいただきたい。人生悲喜こもごもあるとき人はお酒を飲むでしょう。お酒によって心が癒されたり、その場が盛り上がったりするじゃないですか。たばこも同じ嗜好品として人生の彩りだと思うんです。しっかりルールを守って嗜むので、非喫煙者にそのところを理解していただきたいですね。

深澤 私も愛煙家の一人として、同感です。またメーカーとして愛煙家の方々に、あるいは分煙社会において何をしていくべきか再認識できました。

本日はありがとうございました。

お酒落に、粋に、たばこを楽しめる場所をつくる。

深澤 分煙というルールと同時に、愛煙家のモラルも大切ですね。

深澤 たとえ喫煙可能な場所でもお子さんが近くにいたら、たばこを吸うのをやめるでしょう。歩行喫煙やポイ捨ては危険が潜んでいるし、モラルを守れない大人として格好の悪いものです。お酒も楽しいお酒ならいいけれど、クダを巻いたり、酔いつぶれてしまったりすると、お酒そのもののデメリットがクローズアップされ「禁酒運動」へと発展するでしょう。たばこも時と場所をわきまえて、格好の悪い吸い方、モラルに反する吸い方は決してしてはいけないと思います。

末延 そうですね、一方で格好の良い吸い方、たばこの粋な楽しみ方というのもあると思います。1988年に私がニューヨーク支局に勤務したとき、初めて禁煙条例が制定されました。その後改正が繰り返され、禁煙場所が広がったのですが、その産物としてニューヨークにはお酒落な「シガーバー」ができました。私も何度も通いましたし、その後シガーバーはニューヨークのひとつの文化になっていったわけです。横浜市だってこれだけ夜景の美しいポイントがあるわけですから、お酒とたばこを楽しみながらゆっくりと過ごせる大人のスペースがもっと生まれるといいですね。

日本たばこ産業株式会社 横浜支店
深澤 元博